

## 形容詞「ハヤイ」の意味と表記

著者	橋 雄太
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	2
ページ	107-116
発行年	2017
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00001511">http://doi.org/10.15084/00001511</a>

## 形容詞「ハイ」の意味と表記

高橋 雄太 (明治大学国際日本学研究所・日本学術振興会) †

### Meaning and Character Usage of Jananese Adjective “Hayai”

Yuta Takahashi (Meiji University / Japan Society for the Promotion of Science)

#### 要旨

本研究では、近代において複数表記語であるハイの意味を辞書の区分と近代雑誌コーパスの用例を基に分析した。その結果、[動作][作用][基準][期間]の4つの意味を立てられた。近代雑誌コーパスにおいては[基準]の頻度が高く、[期間][動作][作用]は低かったが、大正期に[動作]の用例が増加し、意味変化が起こることがわかった。次に、近代雑誌コーパスを用い、「早」「速」「疾」の表記と、[動作]と[作用]を統合した[速度]、[基準][期間]の3つの意味との対応関係を分析した。その結果、「早」は頻度が高く「疾」と「速」は低かったが、1909年から[速度]の意味を「速」で表記する用例が増え、[基準]と[期間]の意味は「早」、[速度]の意味は「速」で書き分けられていくことがわかった。最後に、ハイの周辺語を調査し、[速度]の意味を「速」で表記するようになることには、運動力学などにおける「速度」などの漢語が背景にあることを明らかにした。

#### 1. はじめに

和語の表記史における近代は、近代以前に多く見られた表記の揺れ（1語複数表記）が、統一（1語1表記）の方向に向かった時代であることが言われている（今野 2013）。高橋(2016)では、和語の動詞の高頻度語 100語を対象とし、『日本語歴史コーパス 明治・大正編I雑誌』の『太陽』を用いて計量的に分析することによって、和語が「1語複数表記」から「1語1表記」に向かうことを実証的に示した。また、現代語においても複数表記が残る語に関しては、高橋(2015)で「アウ(合,會,逢,遭,遇)」を取り上げ、用例の共起語分析から意味分類を立て、一つの意味に複数の表記が用いられていたところから、特定の意味を特定の表記で書き分けていく方向に向かうことを明らかにした。一方で、高橋(2017)で取り上げた「カタイ(堅,固,硬)」では、明治後期の段階で「堅」と「固」が用いられていたところに、新たに「硬」がカタイに対応する表記として頻用される変化が認められ、対応する表記数が増える現象が確認された。「硬」が限定された意味でしか使用されないことまではわかったが、「硬」が新たに頻用されるようになった要因を解明するには至らなかった。

そこで、本調査では近代において新たに表記が頻用されるようになるハイという語を取り上げ、意味を分析し、ハイの意味と表記の対応関係の推移を、コーパスを用いて計量的に分析することによって、複数の表記が必要になることの背景・要因を明らかにする。

#### 2. 調査方法

##### 2.1 意味の区分

多義語の意味分析においては、複数の意味のうち、まず最も基本的な意味を認定し、その意味を基点として、多義がどのような動機づけで拡張していくか、また意味間の差異を明らかにすることによって、意味の区分を立てる。本研究では、2.3の先行研究における意味区分の問題点を考察し、表記の分析に適切な意味の区分を認定するほか、意味分析によって立てら

† yutati.h@gmail.com

れた意味の区分・分類が、近代におけるハヤイの実態に適用できるかを確認するために近代雑誌コーパスの用例を用いて分析する。

## 2.2 調査対象

### 2.2.1 辞書

本研究ではハヤイの意味の区分を考える指針として、複数の現代語の辞書を用いて、その意味の記述と区分を基に分析する。調査対象とする辞書を選定する上では、中高生向けではなく一般向けであること、なるべく各語義に用例がっていることを重視し、『新潮現代語辞典』、『新明解国語辞典』、『学研国語辞典』の3つの辞書を選んだ。

### 2.2.2 コーパス

2.2.1の辞書の意味区分は現代語をベースに行われているが、本稿の目的としている近代におけるハヤイの意味と表記の分析のためには、近代語の用例から分析を行うことが求められる。そこで、本研究では国立国語研究所から公開されている『日本語歴史コーパス 明治・大正編1雑誌』の『太陽』を使用する。『太陽』のコーパスは、博文館より刊行された総合雑誌『太陽』の1895(明治28)年、1901(明治34)年、1909(明治42)年、1917(大正6)年、1925(大正14)年の5年分(計60冊分)を対象とした全文コーパスである。総字数が約1600万字、国立国語研究所の短単位にして約1090万語という大規模のものであり(服部ほか2016)、また、分量の多さ、多様な記事ジャンル、著者層や読者層の厚さという特長がある(田中2005,2012)。多様な言語資料の性質を単体で合わせ持ち、近代語の資料として代表性を有しており、表記の変遷の調査に適切な資料であると言える。

## 2.3 先行研究

辞書を用いてハヤイの意味の区分を調査した研究としては丹保(1993)が挙げられる。丹保(1993)では、5つの現代語の辞書におけるハヤイの意味の区分と記述を比較し、多義の独立度を算出することによって、意味の区分を認定している。多義の独立度は、(1)の式によって算出され、概ね、多数の辞書に記述のある意味は独立度が高く、反対に記述のある辞書が少ない意味は独立度が低いと考えられ、一定の独立度のある意味をその語の意味として認めている。

$$(1) \text{各多義の独立度} = (1 / \text{辞書 A の多義数} + 1 / \text{辞書 B の多義数} \dots) / \text{辞書数}$$

ハヤイは、独立度の高い[動作][作用][基準時][期間][時機]の5つの意味から成り立つとし、さらに、上位分類として[動作]と[作用]の「動作・作用」のグループと、[基準時]、[期間]、[時機]の「時間・順序」グループにまとめることができるとしている。

ただ、丹保(1993)はあくまで辞書の記述から数値的に意味を区分した調査であり、用例によって意味間の違いを論じておらず、例えば[基準時]と[時機]などの差が明確に述べられていないという問題点が指摘できる。

本調査においても、3.1で辞書の記述と意味区分を参照してハヤイの意味を分析するが、意味の区分をした上で、3.2では近代雑誌コーパスの用例を用い、意味の区分や記述が妥当であるかを考察する。

## 3. ハヤイの意味分析

### 3.1 辞書の意味区分の比較

2.2.1で選定した3つの辞書のハヤイの意味の区分と記述を、おおむね同じ内容を指している意味を照合して一覧にすると、表1のようになる。

表 1 辞書の意味区分と記述

意味番号	『新潮現代語辞典』	『新明解国語辞典』	『学研国語大辞典』
1	時間があまりかからない。すばやい。てっとりばやい。	比較の対象とする（一般に予測される）ものと比べて、時間を要しない様子だ。	一定の時間内にたくさん・変化する(動く)ようすである。スピードがある。すみやかだ。
2	動きが急である。すばしこい。		
3	作用の速度が大きい。		
4	まだその期間・時期でないさま。	時間的にまだ先のことだととらえられる様子だ。	まだその時期ではない。
5		比較の対象とする(一般に予測される)ものに比べて、時間的に先になる様子だ。	基準になる時とくらべてそれより]期間・時期が前である。
6	ある期間の中で始めの方であるさま。間もない。		

まず、意味番号 1 の記述をみると、一定時間に動く度合を基準とするか、一定の時間を基準とするかによって記述が異なっているが、いずれも「一定時間あたりの動く度合が大きい」ことを表していると考えられる。意味番号 2 の「動きが急である」という記述も、物理的な動作・移動を伴う意味であり、これも同様に「一定時間あたりの動く度合が大きい」意味に含められるであろう。一方で、意味番号 3 の「作用の速度が大きいさま」は、意味番号 1,2 が物理的移動・動作を伴うのに対して、「進行がハヤイ」のような、事柄の変化の進行の速度に関する意味であり、物理的か概念的かの異なりがあることから区別できる。以上の 2 つの意味は、いずれも「速度」に関連する意味であり、丹保(1993)に倣って、それぞれを[動作]と[作用]の意味とする。

次に、意味番号 4,5,6 について記述をみると、いずれも時間に関する意味であり、速度が関わる[動作]と[作用]の意味とは区別できる。意味番号 4 と 5 は、丹保(1993)でそれぞれ[時機]と[基準時]とされていた意味で、「結婚はまだハヤイ」のように、適切なタイミングに至っていないことを表す[時機]のニュアンスを重視して[基準時]と区別したものと思われるが、どちらの意味もある基準となる時点が設定されており、その時点よりも前であるという命題は共通していると考えられる。このことから、本調査では意味番号 4,5 の意味を統合して[基準]の意味として考える。最後に、意味番号 6 の「ある期間の中で始めの方であるさま。間もない。」という意味は、設定されるのは「ある時点」ではなく、「ある期間」であり、意味番号 4, 5 とは区別できる。例えば「一日」という期間を設定した場合、その始めの方である「朝」を指し、「一年」という期間を設定した場合、その始めの方である「春」を指して、ハヤイと表現する意味である。この意味を[期間]の意味とする。

以上のように辞書の意味の区分と記述からハヤイの意味を分析すると、ハヤイは[動作][作用][基準][期間]の 4 つの意味から成り立つと考えられる。3.2 では、本項で立てた 4 つの意味分類と『太陽』の用例を照合し、意味の区分の妥当性を検討する。

### 3.2 『太陽』の用例と意味分類の照合

本項では、3.1で立てられた[動作][作用][基準][期間]の4つの意味区分が、近代におけるハヤイの実態に即しているかどうかを検討するために、『太陽』のコーパスから得られる用例の分析を行う。その際、「気が(の)ハヤイ」「手っ取りバヤイ」「手がハヤイ」「話がハヤイ」「ハヤイ話」「耳がハヤイ」が見受けられたが、これらは形式化によって別の意味を発生していると考えられるため、分析の対象外とする。

#### 意味1[動作]〈物体の時間当たりの動く度合いが大きいさま〉

(2)それが吾が地球を距ることは、光の速さでも、約く三十二箇年を要する程に遠い、

(鶴田賢次「普通講話 宇宙開闢論」1909年6号)

(3)伊豫の三津ヶ濱の前面には興居島といふ大きな横島があつて、其間の水道は潮は早いが船の往來は甚多い。

(柳田国男「島々の物語」1909年6号)

(4)實際そんなに沾粘るなら沙塵が着重りて疾く走り得ぬ筈で無か。

(南方熊楠「蛇に関する民俗と傳説(完)」1917年14号)

(5)びつくりしてみると、だんだん早くムチャクチャにまはり出し、スーとガスのまんなかをつきぬけた。

(稲垣足穂「タルホ五話(クリスマスの夜の前菜)」1925年14号)

はじめに、物体が移動する、または動いて動く度合いが大きいことを意味する[動作]の意味と判断できる用例について詳しく用例をみると、(2)の「ハヤさ」のような名詞形、(2)のように述部における終止形、(3)のように連用形で用いられるなど用法上の制約が少ないという特徴がある。(2)、(3)、(4)はいずれも物体の移動速度が高いことを表しているが、(5)の回転のように、直線的な移動に限らない物的な動き・動作についてもハヤイと表現した例もある。この例も同様に、一定の時間当たりの動く度合いが大きいことをハヤイと表現していると考えられる。よって、この意味のハヤイを〈物体の時間当たりの動く度合いが大きいさま〉と記述する。

#### 意味2[作用]〈作用の時間当たりに進む度合いが大きいさま〉

(6)歐羅巴の各國中、伊太利は最も人口繁殖が速い、また一般に風俗穢なく、殊に乞食の多きは、他に比類無い相だ。

(坪谷水哉「伊太利南方の旅」1909年2号)

(7)なる程さういふ物は一寸見たところは好いが、地が早く弱るとか、色が褪め易いとかで、眞に實質を備へた純美なる物が少ないやうだね。

(泉鏡花「文教と三越呉服店 三越趣味に就て」1909年5号)

(8)『然し刻限の経つのは早うムりますから、其時になつて、珠と書附が此方の手へ戻りませぬと彼女が何を言ひ出すか知れませんでな。』

(前田曙山「長篇小説 息のぬぐみ『第四回』」1925年5号)

(6)の「人口繁殖」のような抽象概念の速度に関する例をはじめとして、(7)のような状態変化(成長・伸縮などもここに含めた)、(8)の「刻限」のような時間の経過などは、ある作用が、一定の時間内で変化するとき、その度合いが大きいことをハヤイと表現していると考えられる。3節でも述べたように、意味1の[動作]とは物理的か概念的かで明確に区別することができ、

この意味のハヤイを〈作用の時間当たりに進む度合いが大きいさま〉と記述する。

**意味3[基準]〈ある基準となる時点より前であるさま〉**

(9) 若し他の人より早く歸らうと思はば、火事場へでも行つたやうに、突き退けはねのけ、死物狂ひでかからねばならぬ。

(上司小剣「寄席と家庭」1901年10号)

(10) 「餘り逆はんやうに今日は早く歸つてくれ。」

(村山鳥逕「親兄弟」1909年8号)

(11) そりやあ出掛けるには出掛けるのだが、まだ早い。

(森鷗外(訳)/ライネル・マリア・リルケ(作)「戯曲 家常茶飯」1909年3号)

(12) 「…僕から言ふのは妙だけれど、少し一緒になるのが早過ぎましたね。友人間でも専ら然ういふ評判です。」

(柳川春葉「誇」1909年16号)

用例が[基準]の意味であるかどうかを判断する上では、基準となる時点が認定できるかどうかによる。例えば(9)では「他人より早く」という記述から、他人が同じ行為をする時点を経験して設定したときに、それよりも前に行為をすることをハヤイと表現していると考えられる。(10)のような、後ろに命令、依頼、使役などの形式が接続する例もこの意味の典型的な形で、設定される基準としては、(10)の場合は「通常・普段帰るタイミング」であると考えられ、それより前の時点で「帰る」ことを依頼していると捉えられる。(11)の場合、「出掛けるのに適切なタイミング」が基準として設定でき、発話の時点がその基準時よりも前であると考えられる。(12)のように、「過ぎる」が後接する形もこの意味の典型的な形式である。

また、定型句的表現として、「一刻もハヤク」や「一日もハヤク」のような「時間+も+ハヤク」、「おそかれハヤカレ」、「ハヤクも～する」という形式があり、これらの用例も[基準]の意味と判断し、この意味に含む。「ハヤクも～する」の形をとるものは、辞書によっては「ある基準点より後で、間もない様子」を表しているとしているものもあるが、発話の時点、あるいは一般的に想定されるあるタイミングよりも、前に行為する・変化が起きることを意味しているとも解釈できるため、この意味に含める<sup>1</sup>。

以上のように、ある時点が設定され、その時点よりも前であること表す意味が認められ、この意味のハヤイを〈ある基準となる時点より前であるさま〉と記述する。

**意味4[期間]〈ある期間のなかで始めの方であるさま〉**

(13) 夜は必ず十時に寝に就き、朝は早く起きて勉強するのを習慣とされた位だ。

(記者「編輯雜記」1909年6号)

(14) 孵化の適季は種類によりて同じからず、體大種は通常春期早く孵化するを利とす、

(上野英三郎「農業世界」1901年1号)

(15) しかれば我邦太古に音樂の起りたるや明にして、神代早く詔琴あり。古事記大穴牟遲神、其兄弟八十神に悪まれ玉ひ、諸の害苦を受けられたりしとき、

(宮島春松「神樂」1895年6号)

<sup>1</sup> ただし、「ハヤクも一年が過ぎました」のような、過去形で時間経過などを表す場合は、意味2の[作用]と解釈した。

最も典型的な用例は,(13)のように「朝」を伴うもので、「一日」という期間が設定されたとき,その始めの方である「朝」を指してハイイと表現しているとわかる。このように,ある期間が設定されたときに,その始めの方であることを指す例は「一日」に限らず,(14)の場合は「一年」という期間のうちの「春」,(15)の場合は「歴史」という期間のうちの初期,「神代」をハイイと表現しているのであろう。これらの例は,期間の中に基準点を設定する必要性はなく,意味3とは別の意味として捉えられる。よって,この意味のハイイを〈ある期間のなかで始めの方であるさま〉と記述する。

以上のように、『太陽』の用例を基に分析した結果,ハイイは近代においても[動作][作用][基準][期間]の4つの意味から成り立つと考えられる。次節では,本節で立てた4つの意味分類を基に,表記との対応関係の推移を分析する。

#### 4. ハイイと表記の推移

表2には、『太陽』におけるハイイの表記別頻度の推移を示した。

表2 ハイイの表記別頻度の推移

表記	1895	1901	1909	1917	1925
全表記	375	297	289	293	367
早	323	269	253	271	337
速	6	4	16	11	23
疾	20	7	15	5	2
夙	2	2	1	0	0
駛	2	0	1	1	0
迅	1	0	0	3	0
敏	2	0	1	0	0
快	0	0	0	0	0
絶急	0	0	1	0	0
迅疾	1	0	0	0	0
か	18	15	1	2	5

頻度の高い主要な3表記についてみると,「早」が最も頻度の高い表記で,「速」と「疾」とは頻度に大きな開きがあることがわかる。増減傾向については,「早」は一定の頻度が保たれ,「速」は微増の傾向にあり,「疾」は減少の傾向にあることが見て取れる。

次に,前節で立てた意味分類を基に,表記と意味の対応の推移を観察する。意味分類別に頻度の推移を示すと,表3のようになる。

表3 ハイイの意味分類別頻度の推移

意味分類	1895	1901	1909	1917	1925
動作	4	4	19	17	28
作用	2	0	7	0	6
基準	345	281	221	244	285
期間	22	11	18	26	27

[基準]が頻度において優勢で,[動作]や[作用],[期間]は劣勢である。[動作]の意味は1895年の段階では低頻度であるが,1909年頃から増加している。[期間]の意味は一定の頻度が保た

れている。一方,[作用]は特に頻度が低く,用例の見られない年次もある。

[作用]の意味については,次にみる表記別の推移においても,同じ「速度」に関連する意味の[動作]と対応する意味分類に差異が認められないため,以降の表記の分析においては[動作]と[作用]を合わせて[速度]の意味として集計する。なお,表2の「夙」以下5表記と熟字訓は頻度が低く限定的な使用であり,用例分析が不可能であるため,以降の表記の分析においては「早」「速」「疾」の3表記を分析の対象とする。

意味分類別,かつ表記別に頻度の推移を示すと,表4のようになる。

表4 ハヤイの意味と表記の対応の推移

意味分類	表記	1895	1901	1909	1917	1925
[速度]	早	2	1	8	2	12
	速	1	2	15	10	21
	疾	2	1	2	4	1
[基準]	早	303	257	204	238	279
	速	5	2	1	1	1
	疾	14	6	13	0	1
[期間]	早	17	10	18	25	26
	速	0	0	0	0	0
	疾	4	0	0	1	0

[速度]の意味においては,1901年までは頻度が低いため傾向はみられないが,1909年に頻度が高くなって以降は「速」が優先的に使用されている。[基準]の意味においては,1895年の段階では「早」の他に「疾」もある程度使用されていたが,1917年以降は「早」で統一されている。[期間]の意味においては,「早」及び「疾」が使用されるが,1901年以降は「早」で統一されている。

表記別にみると,「早」は全ての意味で使用されるが,[基準][期間]の意味で統一的に用いられるのに対し,[速度]の意味では他の表記より低頻度である。「速」は1895年の段階では[速度]よりもむしろ[基準]の意味の頻度が高いが,1909年以降はほぼ[速度]の意味に占有されている。「疾」は1909年までは[基準]の意味での使用が比較的多いが,[速度]の意味にも使用され,1925年にはほぼ使用されなくなっている。高橋(2015)では,「アウ」という語に対応する「合」「會」「逢」「遭」「遇」の表記と意味の対応関係を調査し,特定の意味との結びつきの強い「合」「遭」「會」は残り,いずれの意味にも使用されていた「逢」は1925年に衰退し始め,「遇」はほぼ消滅するという変遷を明らかにした。このことから,多義語において複数表記が用いられる場合,特定の意味と結びつきの強い表記は生き残り,結びつきの弱い表記は淘汰される傾向にあると考えられる。

これらのことから,以下のことが分かる。

- ①ハヤイは意味変化を起こしており,特に[速度]の意味の頻度が増加している。
- ②「速」は[速度]の増加に伴い頻度を増し,特定の意味と結びつきのない「疾」は減少する。
- ③1925年では[基準][期間]と「早」,[速度]と「速」の結びつきが強い。

#### 4.1 「速」の頻度の増加

「速」の表記が勢力を増すことに関して,実際の用例を観察すると,次の(16)や(17)のような用例が多いことに気がつく。



(16) 或はブーメランの運動は、第一、ソレが動き進まうとする最初の速さと、ソレが、グルリと廻る最初の速さとも由り、第二、其面が、垂直の向きに對して傾く度合と、ソレを抛げ出す仰向きさ加減に

(鶴田賢次「普通講話 燕カヘシ」1909年2号)

(17) 推進機の回轉速度は最高能率の時より速きを要する結果、双方ともに其効率を低下せしめ、聯合の推進效率が亦従つて低くなるを免れぬのである

(加茂正雄「舶用動力界の革命」1917年5月)

これらの例のように、運動力学、あるいは天文学などの学術的文章において、物体の移動の速度を表す概念としての「ハヤさ」の表記として、(17)の前文脈にも登場する「速度」という漢語に用いられる「速」が、「速度」に対応する和語の「ハヤイ」の表記として定着したと推測される。語彙素「速度」を『太陽』で調べると、1895年の段階では10件であったのが、1901年には49件まで増加し、以降頻度が保たれている。1901年頃から、学術的に数値化できる概念を表す漢語が勢力を増し、それに伴って対応する形容詞の和語として、「一サ」の名詞形が頻用され、「速」が適用されたと考えられる。また、日清戦争下にあった1895年においては、鉄道や軍事兵器に関する記事が多く載せられ、「高速」「速力」「加速」などの性能を数値化するための概念として使用されている漢語も見受けられる。このことも、ハヤイを「速」で表記することの背景にあると考えられる。

この傾向はハヤイにのみ限定して見られるわけではなく、高橋(2017)で取り上げたカタイにおいても見られた。カタイには1895年の段階ではほぼ「堅」と「固」のみが使用されていたが、1901年以降に金属などの硬度を表す概念としての「カタさ」に使用される表記として、「硬」が頻用されるようになる変化が見受けられた。近代において特定の概念を表す漢語が新たに出現したときに、「高い」や「深い」のように、もともと漢語の表記と対応する和語の表記が一致する語はそのまま「高さ」や「深さ」と表記されるが、「早い」や「堅い」のように漢語の表記と対応する和語の代表的な表記が異なる場合は、新たに「速」や「硬」で書き分ける必要性が出たことが、新たに表記が頻用されるようになる要因として考えられた。

#### 4.2 速度の変化を表す表現

上述の学術的文章における[動作]の意味において速度が上昇することを表している例をみると、以下の(15)のように「ハヤクなる<sup>2)</sup>」と表現していることがわかる。これらの例では「速」が優先的に用いられることがわかる<sup>3)</sup>。

(15) 内方に残存せる星雲は其後更に冷却收縮して廻轉が速くなり環を分離し其環は一團となつて第二の遊星を生ずる、

(新城新蔵「宇宙觀と人生觀」1917年2号)

「ハヤクなる」という形式は、近代、特に『太陽』に1909年に初めて出現する形式であり、

<sup>2)</sup> 「ハヤクする」は7件あり、いずれも[基準]の意味で「早」の表記が用いられた。

<sup>3)</sup> 「ハヤクなる」の用例のうちには、「速力が速くなる」という表記も見受けられた。後述するように、「速力」が直前に接続したために、「速」の表記の連続を避けて、別の表記を用いたものと思われる。

近代において「速度」を表す概念としての「ハヤさ」という形が出現すると同時に、新たに「ハヤクなる」という表現が定着し、同様にその表記として「速」が用いられたのだと考えられる。

ハヤイと同じ語幹を持つ動詞にハヤマルとハヤメルがある。こちらも[動作]において速度の変化を表すことのできる表現であるが、『太陽』の用例を分析すると、全用例が「早」で表記されていることから、「ハヤクなる」とは表記の実態が異なることがわかる。

ハヤマルは『太陽』に6件(1901年1件,1909年1件,1917年2件,1925年2件)出現している。うち[動作]を表すのは「足並みがハヤマル」の1件であり、「早」で表記されている。ハヤメルは『太陽』に37件(1895年2件,1901年8件,1909年4件,1917年14件,1925年9件)出現している。「歩調/足をハヤメル」などの[動作]の意味の例が20件あり、いずれも「早」で表記されている。この要因としては、[動作]の用例のほとんどが歩調に関する記述であり固定的であることや、語自体の頻度が低いため、それまで固定的に用いられていた「早」が継続して用いられたことが考えられる。その他、「速力を早める」の例も3例見受けられた。3例のみでは確実なところはわからないが、直前に「速力」という語が前接する例に限って「早」との表記が用いられているところを鑑みると、「速」の文字が連続することを避けたと捉えられる。

#### 4.3 ハヤイの表記のまとめ

4.1,4.2 では周辺語から「速」が新たに頻用されるようになることの要因を考察した。[速度]に関する意味においても、固定的な表現においては「早」が継続的に用いられることもあるが、近代において新たに出現した学術用語としてのハヤイに対応する表記として、「速度」や「速力」といった漢語に用いられる「速」で書き分けていくようになったことが明らかになった。

#### 5. 結論

本研究では、近代におけるハヤイの意味を辞書の意味区分と近代雑誌コーパスの用例を基に分析し、立てられた意味分類を基に表記との対応関係の分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- ①ハヤイは[動作],[作用],[基準],[期間]の4つの意味から成り立つ。
- ②近代においてハヤイは意味変化を起こしており、[動作]の意味の頻度が特に増加している。
- ③「速」と「疾」は明治後期の段階では頻度が低かったが、「速」は[速度]の増加と共に頻度を増した。反対に「疾」は減少し、1925年の段階でほぼ使用されなくなっている。
- ④1925年には[基準],[期間]を「早」,[速度]を「速」で書き分ける方向に向かう。
- ④学術的な記事における「速度」の概念が出現することにより、対応する和語のハヤイの表記として、「速」が頻用されるようになった。

現代語では近代における「早」と「速」よりも意味との対応関係が厳密であり、かつ[速度]の意味の勢力が近代よりも大きいと考えられ、近代はハヤイの意味・用字法が変化する、過渡期であったことがわかる。さらに、近代において特定の概念を表す漢語が新たに出現したときに、その漢語に使用される表記が対応する和語の特定の意味にも用いられたことが、複数表記の書き分けの一端を担っていると言えるだろう。

稿者はこれまで〈性質〉を表す「カタイ」、そして本稿で〈時間〉を表す「ハヤイ」を分析し、複数表記の形容詞を中心に考察してきた。今後は、異なるタイプの形容詞として、〈感情〉を表す「オソロシイ」や、〈程度〉を表す「ハゲシイ」を分析し、そのうえで形容詞全体の用字法について考察していきたいと考えている。

### 謝 辞

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費 17J03579「近代における和語の表記の変遷」(代表：高橋雄太)による成果の一部である。

### 文 献

- 今野真二(2013)『正書法のない日本語』岩波書店,pp.1-189
- 高橋雄太(2015)『『太陽コーパス』における和語動詞「あう」の用字法』『第7回コーパス日本語学 ワークショップ予稿集』国立国語研究所, pp.195-202
- 高橋雄太(2016)「近代における和語の表記の変遷 —複数表記から単一表記へ—」『国際日本学研究 論集』第4号,明治大学大学院, pp.37-48
- 高橋雄太(2017)「形容詞「カタイ」の意味と表記—近代雑誌コーパスを用いて—」『国際日本学研究論集』第6号,明治大学大学院,pp.1-18,印刷中
- 田中牧郎(2005)「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』論文集』博文館新社, pp.1-48
- 田中牧郎(2012)「近代語コーパスにおける資料選定の考え方」『近代語コーパス設計のための文献 言語研究 成果報告書』国立国語研究所, pp13-26
- 丹保健一(1993)「辞書に見られる多義立項基準をめぐって-状態、時間、類型、程度、価値、性向形容詞の場合—」『三重大学教育学部研究紀要』第44巻,三重大学教育学部,pp.13-34
- 服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子, 小木曾智信(2016)「『日本語歴史コーパス 明治・大正編I 雑誌』ver.1.0の公開」『日本語学会 2016 年度秋季大会予稿集』日本語学会, pp.157-162

### 辞書

- 金田一春彦,池田弥一郎編(1988)『学研国語大辞典 第二版』学研プラス
- 山田俊雄, 白藤礼幸, 築島裕, 奥田勲編(2001)『新潮現代国語辞典 第二版』新潮社
- 山田忠雄,柴田武,酒井憲二ほか編(2012)『新明解国語辞典 第七版』三省堂

### 関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>